

# 母語話者と非母語話者による会話におけるあいづち — 日・英語会話の比較 —<sup>(1)</sup>

大塚 容子

## Back-channel in Intercultural Communication between Native and Non-native Speakers — Comparison between English and Japanese conversations —

Yoko OTSUKA

### Abstract

The purpose of this study is to examine how native speakers of Japanese and native speakers of English differ in their use of back-channels in intercultural communication and the extent to which this difference influences rapport building among the participants.

The co-operative back-channeling by native speakers of Japanese and native speakers of English seems to function effectively in building rapport. However, overfrequent use of back-channeling by native speakers of Japanese does not seem to lead to rapport building.

### Key words

back-channel, intercultural communication, common ground, rapport building

### はじめに

あいづちは聞き手の反応の一つである。日本語母語話者は英語母語話者より頻繁にあいづちを打つと言われている（メイナード（1993））。これは言語によって聞き手の反応が異なることを示唆しており、異文化コミュニケーションでは会話参加者がその違いに気づかずに自分の母語の方法でコミュニケーションをすることによって、会話参加者間で誤解を生む可能性がある。

大塚（2007）は日本語母語話者の英語使用場面におけるあいづちの使用を会話管理ストラテジーの観点から調査・分析した。その結果、日本語母語話者は英語使用場面においても日本語会話における聞き手の反応、つまりあいづちを頻繁に打つことによって会話を展開していこうとする傾向が見られた。しかし、この日本語母語話者の反応は英語母語話者には会話に積極的に参加していないと解釈された。水谷（1983）はこのような日本語の、あいづちを打つという聞き手の反応に着目し、日本語の会話展開を「共話」と呼び、欧米の「対話」型の会話展開と区別した。日本語母語話者は無意識のうちに、この共話型の会話展開を英語会話のなかに持ち込み、一方、英語母語話者は対話型の会話展開を日本語母語話者に期待したのである。

本稿では、大塚（2007）に加え、日本語母語話者と英語母語話者による日本語での会話におけるそれぞれの会話参加者の聞き手の反応をあいづちの使用に焦点を絞って調査し、日本語と英語に

※ E-mail [ykotsuka@ha.shotoku.ac.jp](mailto:ykotsuka@ha.shotoku.ac.jp)

おけるあいづちの使用の違い、また、英語と日本語におけるあいづち使用の違いがどの程度ラポールの構築に影響を与えるのか、を考察する。まず、Clancy et al.(1996) の ‘Reactive Tokens’ について概観し、本稿におけるあいづちを規定する。次に調査方法について説明し、あいづちの使用頻度・種類について調査分析し、ラポールの構築との関係について検討する。

## 1. あいづち

日本語と英語におけるあいづちについて概観しておく。

### 1.1. 日本語のあいづち

日本語のあいづちに関する研究のなかで言語表現に焦点をあてたものとして、水谷 (1988)、堀口 (1988,1997)、村田 (2000) 等がある (大塚 (2007) 参照)。メイナード (1993)、久保田 (2001) はうなずきや視線等の非言語行動も含めているが、本稿では笑いや非言語行動は扱わない。

堀口 (1997:42) は、あいづちを「話し手が発話権を行使している間に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える表現」と定義し、その典型的な例としてあいづち詞 (堀口 (1988)) を挙げている。これは日本語教育の観点から捉えた命名で、一般に聞き手があいづちとして発する「うん」「はい」「ええ」「そうですか」などの定型表現を指す。さらに、あいづちが発話権の取得に関与せず、情報の共有の確認という機能をもつことに着目し、繰り返し、先取り発話もあいづちと同様の機能をもつとしている。

### 1.2. 英語のあいづち

英語では、一般に日本語のあいづちに相当する聞き手の反応を “back channel” と呼んでいる。この用語を最初に用いたのは Yngve (1970:568) で、“back channel” を “the person who has the turn receives short messages such as “yes” and “uh-huh” without relinquishing the turn” と定義している。

ところで、Clancy et al. (1996) は文化を異にする聞き手の反応を統一的に捉える手段として ‘Reactive Tokens’ という用語を使用した。‘Reactive Tokens’ とは “a short utterance produced by an interlocutor who is playing a listener’s role during the other interlocutor’s speakership” (Clancy et al. (1996:356)) と定義され、backchannels、reactive expressions、collaborative finishes、repetitions、resumptive openers が含まれる。聞き手の反応である backchannels を拡大したものと考えられ、堀口 (1997) の繰り返し、先取りあいづち、先取り発話と共通する部分が見られる。

### 1.3. 調査対象とするあいづちの定義と分類

これらの研究を踏まえ、本稿ではあいづちを広義に解釈する。Clancy et al.(1996:356) の ‘Reactive Tokens’ の定義をあいづちに適用し (Tsuda et al.(2008))、 “a short utterance produced by an interlocutor who is playing a listener’s role during the other interlocutor’s speakership” とする。他の発話者が発話権を保持している間に聞き手の役割をもつ発話者が発した短い発話のことである。そして、あいづちを①非語彙的あいづち、②語彙的あいづち、③繰り返し、の3種類に分類する。

非語彙的あいづちとは、「うん」、「ああ」、「uh」、「mhm」等の、語彙ではない発話によるあいづちのことである。表1は調査会話に現われた非語彙的あいづちである。

表1 日・英語会話に現われた非語彙的あいづち

日本語	英語
うん (ううん、うんうん、等)	hm
ああ (あっ、等)	oh
ふうん	mhm (mmhmmh、等)
へえ	ah
ほう	uh huh
ええ	yeah (yeahyeah、等)
	wow
	phew

語彙的あいづちとは、「はい」、「そうですか」、「本当」、「yes」、「really」等の短い語彙、表現によるあいづちのことである。これらの表現によって floor<sup>(2)</sup>が取られることはない。調査会話に現われた語彙的あいづちを表2に示す。

表2 日・英語会話に現われた語彙的あいづち

日本語	英語
はい (はいはい、はいはいはい、等)	yes (yesyesyesyesyesyesyes、等)
そう (そうそう、あそう、等)	okay
そうですか。	right
そうですね。	Ah, really?
それはよかったですね。	I see.
そうなんや。	That's true.
なるほど	Ah, you're right.
すごい	Ah, that's too bad.

繰り返しは、話し手の発話の一部、あるいは全体を繰り返すことによって聞き手の反応を表わしたものである。(1)、(2)は調査会話に現われた繰り返しの例で、(1)は英語会話の例、(2)は日本語会話の例である。

## (1) [データ2]

E 4 : (前略) I teach management →

→ J 4 : Management

E 4 : and I also teach history and I also teach government (後略)

## (2) [データ3]

E 5 : ええ、yeah、トロント大学生。

→ J 5 : トロント大学生。

E 5 : ああ、で、勉強してます。

## 2. ラポール

FitzGerald (2003 : 19-20) は、あるコミュニケーションが成功したか否かを決定するうえで考慮

しなければならない要因の一つとして、ラポールを挙げている。ラポールとは、会話参加者がどの程度その会話に関与したかを表わすものとし、ラポールの構築に成功した会話には多くの笑いがあり、ユーモアにあふれたものであるという。会話の展開のなかで、会話参加者同士が協調的関係を築くことができたかどうかを示すものである。

あいづちは、Brown and Levinson (1987: 102) のいう ‘common ground’ を主張するストラテジーの一つと考えられ、FitzGerald (2003: 20) が指摘するように、ラポールの構築と密接な関係がある。あいづちを打つことは、話し手と聞き手との間で情報の共有を図ることになり、会話参加者の間に協調的関係を築くことに貢献することになるからである。

### 3. 調査

#### 3.1. 調査資料

本稿で用いるデータは、約30分間におよぶ、それぞれ2種類の英語会話と日本語会話である。これらの会話は、二人の母語話者と二人の非母語話者による初対面<sup>(3)</sup>の4人会話で、ビデオに録画すると同時にMDに録音した。会話終了後、15分程度のフォローアップ・インタビューを行った。フォローアップ・インタビューでは、会話や他の会話参加者について感じたこと、会話の間に不快だと思ったり、誤解したりしたことがあったかどうかを尋ねた。会話を文字化した<sup>(4)</sup>もの、ならびにフォローアップ・インタビューの内容が本調査の基礎資料<sup>(5)</sup>であるが、分析にあたっては録画資料も使用した。

表3は各会話の使用言語、会話参加者を示したものである<sup>(6)</sup>。表中のEは英語母語話者を、Jは日本語母語話者であることを示す。

表3 会話参加者

データ	使用言語	会話参加者
1	英語	E 1、E 2、J 1、J 2
2	英語	E 3、E 4、J 3、J 4
3	日本語	E 5、E 6、J 5、J 6
4	日本語	E 7、E 8、J 7、J 8

会話のテーマは、データ1が留学生のための歓迎会を企画するというタスクを完成させる会話、データ2～4は、異文化理解についての自由会話である。

#### 3.2. 調査手順

非語彙的あいづち、語彙的あいづち、繰り返しをあいづちターンとし、それ以外のターンを通常ターンと呼ぶことにする。会話中に使用されたあいづちターンを量的、質的に調査する。

### 4. 結果

#### 4.1. フォローアップ・インタビュー

フォローアップ・インタビューにおける会話参加者のコメントを以下に示す<sup>(7)</sup>。

## 4.1.1. データ1 (英語会話)

英語母語話者 : 相手に不快感をもたなかった。会話進行中、何も問題はなかった。

日本語母語話者 : 相手に不快感をもたなかった。会話進行中、何も問題はなかった。

## 4.1.2. データ2 (英語会話)

英語母語話者 : 日本人がしゃべらない。答えない。反応がない。

日本語母語話者 : 息つくひまもない。ついていくのが精一杯。大変疲れた。

## 4.1.3. データ3 (日本語会話)

英語母語話者 : 会話は難しい。単語をたくさん忘れていた。沈黙が起こっても不快だとは感じなかった。沈黙が生じると、話題を提供しなければならないと思い、話題を提供した。わからない表現なども全体から推測した。

日本語母語話者 : 英語母語話者がわからないところはわからないと言ったので、話しやすかった。沈黙のときは何を話そうかなと考えた。話を膨らませようとしたが、質問ばかりすると詰問しているようになるので、相手から話題が出るのを待った。英語母語話者の話でわからないところがあっても、言葉で伝えるのではなく、表情でわからないことを伝えようと思った。

## 4.1.4. データ4 (日本語会話)

英語母語話者 : 会話は苦手。わからないところもあったが、推測した。いつもは日本人男性と乱暴な言葉や話題で話すが、今回は女性が相手なので緊張した。話す話題があまりない。沈黙が生じたときは話さなければと思った。相手からの話題提供を待とうとは思わなかった。日本語ではなるべくうなずこうとした。

日本語母語話者 : たまにわからないところがあったが、相手が一生懸命に話しているので推測して理解しようとした。何を話そうか考えた。英語圏では沈黙は退屈であることを意味すると思うので、話さなくてはと思った。男性 (英語母語話者) が一人だったので、話題の提供に迷うことがあった。

## 4.2. ラポールの有無

フォローアップ・インタビューの結果を基に、ラポールが存在したかどうかを判断した。表4は各会話におけるラポールの有無を示したものである。+はラポールが存在したことを、-はラポールが存在しなかったことを、±はいずれでもなかったことを示す。

表4 ラポールの有無

データ	ラポール
1	+
2	-
3	+
4	±

データ1と3の会話は友好的に進められ、会話参加者間にラポールが生まれた。データ2は互いに相手に悪い印象をもち、ラポールは生まれなかった。データ4は、相互の印象は悪くなかつ

だが、会話そのものはあまり弾まなかった。

#### 4.3. あいづちターンの使用率

各データにおける母語話者と非母語話者のあいづちターン数、通常ターン数、ターン総数、ターン総数に占めるあいづちターン数の割合を示したのが表5である。「はいはいはい」のように同一の表現が連続して使用されている場合、一つのあいづちターンとみなした。

表5 会話参加者のあいづちターン、通常ターンの使用数

データ	会話参加者	あいづちターン	通常ターン	総数	あいづちターン／総数
1 英語会話	英語母語話者	70	223	293	23.90%
	日本語母語話者	173	259	432	40.00%
2 英語会話	英語母語話者	16	185	201	8.00%
	日本語母語話者	72	61	133	54.10%
3 日本語会話	英語母語話者	70	288	358	19.60%
	日本語母語話者	128	272	400	32.00%
4 日本語会話	英語母語話者	34	148	182	18.70%
	日本語母語話者	183	132	315	58.10%

会話の使用言語に関係なく、日本語母語話者のほうが英語母語話者よりターン総数に占めるあいづちターン数の割合は高い。

英語会話をみても、データ1では、日本語母語話者が英語母語話者より多くの通常ターンを取っているが、日本語母語話者のターン総数に占めるあいづちターン数の割合は英語母語話者より高い。データ2では、日本語母語話者のターン総数に占めるあいづちターン数の割合は英語母語話者の約7倍となっている。

日本語会話では、いずれも英語母語話者の通常ターン数が日本語母語話者の通常ターン数を上

表6 会話参加者の用いたあいづちの種類と使用数

データ	会話参加者	非語彙的あいづち	語彙的あいづち	繰り返し	合計
1	英語母語話者	54	16	0	70
	日本語母語話者	119	41	13	173
2	英語母語話者	11	5	0	16
	日本語母語話者	69	0	3	72
3	英語母語話者	47	22	1	70
	日本語母語話者	100	8	20	128
4	英語母語話者	25	9	0	34
	日本語母語話者	154	10	19	183

回っている。データ3では、日本語母語話者のターン総数に占めるあいづちターン数の割合が、全データのなかで最も低い。一方、データ4は日本語母語話者のターン総数に占めるあいづちターン数の割合が全データのなかで最も高い。

次に、会話参加者が用いたあいづちの種類と使用数を表6に示す。

いずれのデータにも共通していることが2点ある。第一に、英語母語話者も日本語母語話者も、3種類のあいづちのなかで非語彙的あいづちの使用率が最も高いこと、次に、日本語母語話者のほうが英語母語話者よりも繰り返しの使用率が高いことである。

#### 4. 4. あいづちの使用状況

会話参加者がどのようにあいづちを使用したかを見ていく。

データ1の日本語母語話者は、他のデータの日本語母語話者とは異なり、繰り返しより語彙的あいづちの使用率が高い。これは日本語母語話者の英語運用能力が比較的高く、その場に応じて種々の語彙的あいづちを用いて反応できるからだと考えられる。(3)はパーティーの招待者について話し合っている場面である。日本語母語話者は非語彙的あいづちと語彙的あいづちの両者を使用している。

##### (3) [データ1]

J 1 : Is it, is it okay when they cannot speak English?

E 1 : Well, that, that's a problem for me, because I know like almost zero Japanese→

→ J 1 : Okay.

E 1 : but um

E 2 : But I mean if they maybe speak like a little bit, we speak a little bit→

→ J 1 : Mmhmmh.

E 2 : you can kinda communicate→

→ J 1 : Yes, yes, yes.

E 2 : if some, somebody speaks English, then they can translate→

→ J 2 : Mmhmmh.

E 2 : so would be okay.

(4)はパーティーの会費について話し合っている場面での英語母語話者と日本語母語話者のあいづち行動である。

##### (4) [データ1]

J 1 : Ho, how much do you guess.

E 1 : Suppose it depends on whether there's alcohol or not, cos→

→ E 2 : { Yeah.

→ J 2 : { Mhm.

E 1 : that makes a big difference.

→ J 1 : Yes, yes, yes, yes.

データ2では、日本語母語話者の非語彙的あいづちの使用が顕著である。(5)は英語母語話者が自分の妻のことについて話している場面である。日本語母語話者は非語彙的あいづちを打っている。

## (5) [データ 2]

E 4 : (前略) my wife is Japanese→

→ J 3 : Mhm.

E 4 : she has two other sisters and one of them is married to a Thai, and the other one married to a British.

→ J 3 : Mhm.

E 4 : None of them married to a Japanese.

次に日本語会話のデータ 3、4 について検討する。データ 3、4 の英語母語話者の用いた語彙的あいづちのほとんどは、堀口 (1988) のあいづち詞である。

## (6) [データ 3]

J 6 : 体験、体験入社。

J 5 : インターン [シップ。

J 6 : [インターンシップ。

→ E 6 : ああ、はいはい。

→ E 5 : ああ、ああ、そうですか。

J 5 : 僕は学校が終わって、今働く所を見つけて→

E 5 : ん、ああ、ああ、すみません、今、働いています？

J 5 : 今働いて〈ポーズ〉

→ E 5 : あっ。

J 5 : いなくて、働きたい→

→ E 5 : ああ、はい。

J 5 : これから、これから働きたい。

→ E 5 : ああ、そうですか。

## (7) [データ 4]

J 7 : (前略) で、まだ、学校にも全然行ってないんで、ちょっと英語の勉強もしてないんですけれども、今、仕事をしながら、学校を探してます。

→ E 8 : そうですか。

前述したように、日本語母語話者は英語母語話者より頻繁に繰り返しを用いている。

## (8) [データ 3]

E 5 : ああ、日本は→

J 5 : うん。

E 5 : ああ、とてもいも面白い。

→ J 5 : 面白い。

E 5 : ああ、そして、あん、飲み物は、no no、食べ物はとてもおいしいです。

データ 3 のあいづち行動について見ていく。データ 3 の英語母語話者はあまり日本語を話すことに慣れていなかったため、日本語母語話者は英語母語話者の発話中に種々のあいづちを打っている。

## (9) [データ 3]

E 5 : おう、去年。

→ J 5 : 去年。



- E 5 : 日本に行きました、ああ、い、いげつか、ああ、ええ、東京で住んでいました。  
 → J 5 : うん。  
 E 5 : ああ。  
 J 5 : どうでした？  
 E 5 : あ、とても楽しかったです。  
 → J 5 : そうですね。

一方、日本語母語話者が日本とカナダとの観覧車の違いを説明している(10)では、英語母語話者が頻繁にあいづちを打っている。

(10) [データ 3]

- J 6 : Ferris wheel.  
 全員 : 〈笑い〉  
 E 5 : ああ。  
 J 5 : それが日本では、ううん、ゆっくり→  
 → E 6 : はいはいはい。  
 J 5 : 回って、で、一周→  
 → E 6 : うん。  
 J 5 : 一回だけ、なんですが、トロントのエキシビジョンで→  
 → E 6 : うん。  
 → E 5 : うん。  
 J 5 : 行ったら、すごい速くて、で、何回も→  
 → E 6 : 〔はい。  
 J 5 : 〔回ります。

次にデータ 4 のあいづち行動を検討する。データ 4 の英語母語話者は日本語を話すことに慣れていた。(11)は英語母語話者が自分の経験について述べている場面である。日本語母語話者は頻繁に非語彙的あいづちを打っている。

(11) [データ 4]

- E 8 : 私も今、えっと、オールドチャイナ→  
 → J 7 : うん。  
 E 8 : タウンのそばに住んでいる→  
 → J 7 : うん。  
 E 8 : 住んでいるので→  
 → J 7 : うん。  
 E 8 : 周りはいみんな中国人とか→  
 → J 7 : うん。  
 E 8 : うん、韓国人とか、ちょっとええっと、私の居場所がない→  
 → J 8 : ああ。  
 E 8 : どう気もちよっとしますが→  
 → J 7 : うん。  
 E 8 : ま、その他の文化に触れることが面白いと思って→  
 → J 7 : うん。

E 8 : 楽しいなと思って、それは好きだけど時々はちょっと不安感になる。

→ J 7 : うん。

次の例は英語母語話者のあいづち行動の例である。非語彙的あいづちと語彙的あいづちが用いられている。

(12) [データ 4]

J 8 : ん、なん、私が少し驚いたのは、コーヒーショップで働いてて、すごいお客さんが、なら、並び始めるんですよ、なんかこう、忙しい時間帯に→

→ E 8 : うん。

J 8 : で、日本だったら多分お客さん、が、いっぱい並んでいたら、なんか、ええ、何て言うんやろ、ええ、ええっと、速くせな、速くしないといけないなあって思うんですけど→

J 7 : ううん。

J 8 : こっちのお店ではなんか、ゆっくりす、ゆっくりはしていないんですけど、なんか、お客さんを待たせてても、なんか気にしないみたいな、う、例えば、ウォールマ、ウォールマートとか、スーパーマーケットに行っても、すごい客が並んでるけど、店員さんがすごいゆっくりしてるなあと思って、それがちょっとびっくり。

→ E 8 : そうですね。

## 5. 考 察

ここで、ラポールの構築とあいづちの関係について考える。ラポールが生まれたのは英語会話のデータ 1 と日本語会話のデータ 3 であり、ラポールが生まれなかったのは英語会話のデータ 2、どちらとも言えないのが日本語会話のデータ 4 である。データ 1 とデータ 3 をラポールの構築に成功した会話、データ 2 とデータ 4 を失敗した会話と考えることにする。

使用言語に関わらず、日本語母語話者のほうがあいづちを頻繁に打つ。成功した会話と失敗した会話の大きな違いは英語母語話者と日本語母語話者の総ターン数に占めるあいづちターン数の占める割合の差である。成功した会話は英語母語話者と日本語母語話者間のあいづちターン数の占める割合の差が失敗した会話より少ない。データ 1 はその差が 16.1、データ 3 は 12.4 である。一方、データ 2 は英語母語話者と日本語母語話者との差が 46.1、データ 4 は 39.4 となっている。

成功した会話でのあいづち行動がどのようになっていたのか、もう一度振り返ってみる。データ 1 の日本語母語話者は通常ターン数が多いことからわかるように、英語を話すことに慣れている。そのため、あいづちの種類も非語彙的あいづちだけでなく、語彙的あいづち、繰り返しも使用している。英語母語話者も非語彙的あいづちと語彙的あいづちを両用している。

データ 3 の英語母語話者はあまり日本語を話すことに慣れていない。しかし、そのことが逆に日本人のあいづちを誘発したと考えられる。つまり、英語母語話者の一つ一つの発話は短く、何が言いたいのかわかりにくい部分が多い。日本語母語話者は英語母語話者の発話の意味を推測し、それを確認しながら会話を展開させることになる。あいづちを打つことによって意味の確認を行うのである。これが結果として、日本人同士の会話におけるあいづち行動とよく似たパターンになったのである。また、英語母語話者は日本語のあいづち詞を知っており、ある程度使用することができる。そのため、日本語母語話者は何かについて説明するとき、相手からのあいづちを待って、相手が理解したことを確認して話を進めている。このように、成功した会話では、両言語話

者が共に情報のやりとりをしながら、適度にあいづちを打つことにより、‘common ground’ (Brown and Levinson (1987: 102)) が形成され、ラポールが生まれたのだと考えられる。

失敗した会話、データ2と4では、日本語母語話者のあいづちターン数がターン総数の50%以上を占めている。大塚(2007)で述べたように、データ2の日本語母語話者はあいづちを打つという方法でしか会話に参加することができなかった。しかも日本語母語話者のあいづちターンの95.8%が非語彙的あいづちである。非語彙的あいづちは相手の話を聞いている、あるいは理解しているという消極的な働きかけであり、相手に同意したり共感したりするといった積極的働きかけを表わすことはできない。そのため、英語母語話者には会話に参加しているとは解釈されず、ラポールが生まれなかったのだと考えられる。

データ4の英語母語話者の日本語力はデータ2の英語母語話者より高い。そのため、(11)のように、自分の経験等をかなり長いスパンで話すことができる。日本語母語話者はそれに対してあいづちを打つのだが、そのほとんどが非語彙的あいづちである。データ2と同様、あいづちを打つことによって、相手の話を理解し共有したことは表明できる。しかし、それ以上会話は発展していかない。一方、英語母語話者は日本語話者の発話に対してあまりあいづちを打っていないため、情報が共有されたという感覚を日本語母語話者をもつのは難しいであろう。

フォローアップ・インタビューからもわかるように、データ4の日本語母語話者、英語母語話者ともに、話題の提供に苦勞したようである。特に日本語母語話者のほうは、話題の提供にあたり、男性(英語母語話者)が一人であったことを意識したようである。けれども、日本語母語話者は沈黙に関してある程度の意識をもっていたのであるから、ただあいづちを一方的に打って相手の発話内容を理解したことを示すだけではなく、沈黙が生じたときには、英語母語話者よりも先に話題を提供したりする必要があるように思われる。また、日本語母語話者は英語母語話者の発話に意味のわからないところがあっても、それを聞き返すのではなく、推測して意味を理解しようとした。こうした行動も会話が展開していかなかった一つの要因であると考えられる。相互の印象は悪くなかったにもかかわらず、必ずしもラポールが生まれたとは言えないのは、こうした日本語母語話者の会話の参加のし方も影響していると言えよう。

## おわりに

母語話者と非母語話者の4種類の会話をあいづちとラポールの構築という観点から調査・分析した。まず、使用言語に関係なく、日本語母語話者のほうが英語母語話者より頻繁にあいづちを打つことがわかった。あいづちの種類別にみると、日本語母語話者も英語母語話者も非語彙的あいづちの使用率が最も高いが、語彙的あいづちはデータ1を除いて、英語母語話者のほうが日本語母語話者より使用率が高く、逆に繰り返しの使用率は日本語母語話者のほうが高いことがわかった。

ラポールが生まれたのは英語会話、日本語会話それぞれ1例である。ラポールが生まれた会話では、双方の言語話者が適度に種々のあいづちを打っていた。ある言語話者が一方的にあいづちを多用する会話ではラポールは生まれなかった。

ラポールが生まれるかどうかは、会話参加者の性別、男女の人数、テーマ等とも密接な関係があるように思われる。今後、会話参加者の属性や会話のテーマに配慮してより多くのデータを収集して調査する必要がある。

## 注

- (1) 本稿は2008年8月24～29日、ドイツ、エッセンで開催された AILA 2008 the 15<sup>th</sup> World Congress of Applied Linguistics における口頭発表 Murata, Yasumi, Tsuda, Sanae, Otsuka, Yoko and Shigemitsu, Yuka “Listener responses and their impact on intercultural communication: Same phenomena, different rules” の一部に加筆・修正をしたものである。
- (2) Spolsky (1998 : 122) は floor を “The right to talk at any given moment in a conversation.” と定義している。
- (3) 一方の言語話者同士は初対面ではないという場合があるが、母語話者と非母語話者とは初対面である。
- (4) あいづちが調査項目であるため、他の発話者と重なりがあっても独立した行に記す。
- (5) 本稿でデータとして用いる会話は大学英語教育学会待遇表現研究会の資料である。その一部は、平成15年～16年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)(1)(課題番号15520379)「日本人が話す英語に見られる対人関係構築・維持上の問題点の解明」(研究代表者 堀素子)によるものである。会話の録画、文字化作業、分析の共同作業をした堀素子氏、津田早苗氏、村田泰美氏、重光由加氏、大谷麻美氏、村田和代氏に感謝申し上げる。
- (6) データ1、2の詳細は大塚(2007)参照。データ3は2005年9月11日にカナダで録画した。性別はE5、E6、J5が男性、J6が女性である。データ4は2005年9月18日にカナダで録画した。性別はE7が男性、E8、J7、J8が女性である。
- (7) データ2の結果は重光(2005 : 226)による。データ3、4は奈良大学教養部講師大谷麻美氏より提供された資料による。

文字化の記号について

./。 語尾の音が下がって区切りがついたことを示す。

? 語尾の音が上がっていることを示す。

< > 非言語行動であることを示す。

[ 複数行にまたがる括弧は会話参加者の発話が重なっていることを示す。

行末の→ あいづちなど相手の発話が一時的に重なっているが、発話が継続していることを示す。

語頭の→ 分析の焦点であることを示す。

## 参考文献

- 大塚容子(2007)「日本語母語話者の英語使用場面におけるあいづち的表現—会話管理ストラテジーの観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要〈外国語学部編〉』第46集、75-86頁
- 久保田真弓(2001)『「あいづち」は人を活かす』廣済堂出版
- 重光由加(2005)「何を心地よいと感じるか—会話のスタイルと異文化間コミュニケーション」井出祥子・平賀正子編『講座社会言語科学1 異文化とコミュニケーション』ひつじ書房、216-237頁
- 堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号、13-26頁
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 水谷信子(1983)「あいづちと応答」水谷修編『講座 日本語と表現3 話しことばの表現』筑摩書房、37-44頁
- 水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』第7巻13号、4-11頁
- 村田晶子(2000)「学習者のあいづちの機能分析—「聞いている」という信号、感情・態度の表示、そして turn-taking に至るまで—」『世界の日本語教育』第10号、241-260頁
- メイナード、泉子・K(1993)『会話分析』くろしお出版
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen C.(1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clancy, M. Patricia, Thompson, Sandra A., Suzuki, Ryoko and Tao, Hongyin.(1996) The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics*, 26, 355-387.
- FitzGerald, Helen.(2003) *How Different Are We?* Clevedon: Multilingual Matters.
- Spolsky, Bernard.(1998) *Sociolinguistics*. Oxford: Oxford University Press.

Tsuda, Sanae, Murata, Yasumi, Otsuka, Yoko, Hori, Motoko, Shigemitsu, Yuka, and Otani, Mami. (2008) Intercultural Communication between Native and Non-native Speakers: Japanese and English Conversation Styles and Rapport Development. *JACET Chubu 25<sup>th</sup> Commemorative Journal*, 57-82.

Yngve, Victor H. (1970) On getting a word in edgewise. Paper from the sixth regional meeting, *Chicago Linguistic Society*, 567-578.

